
仁神堂シリーズ

OSEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仁神堂シリーズ

【NZコード】

N4831C

【作者名】

OSERI

【あらすじ】

女社長、國本英恵のもとに個人秘書として派遣されてきた仁神堂 淳。ロボットのような彼と居ると調子が狂う彼女だったが・・・。NY（と日本）が舞台の、結構真面目なラブストーリー。全年齢用の旧サイト、『Crawfish Tail』に置いてあつた看板小説。

「仁神堂」という男

“
仁神堂とい
う男”
[にがみどり
う]
[にがみどり
う]

「仁神堂。肩が凝つたわ。揉んで頂戴。」

移動中の自家用ジエットの革張りの黒いソファで書類に目を通しながら私は秘書の仁神堂浬に命令した。

ロスからダラスまで約4時間。

いつもながら今、この空間には彼と私しかいない。

「かしこまりました。」

感情の抑制された低い声。

もう聞き飽きたわ。

この男が私の元で働き出して一ヶ月。

就寝時以外は秘書兼付き人として常に行動を共にしてきた。秘書としてはこれ以上ない、といって良いほど完璧。

でも、いつも無口無表情で、この男の脳には「感情表現」という言葉が組み込まれているのか?と、会社では氷の女王と呼ばれている私ですら、眉を顰めるほど人間に感情が欠如したような、不可解な男であった。

向かい側に座っていた彼は、腰を上げて私の隣に移動する。8, 2……185はあるのだろうか?均整の取れた体に折り目正しくプレスされたスーツを感じよく着こなしている。

ネクタイの趣味も、悪くない。

「社長、こちらに背を向けてください。」

書類から田を離し、左横に座った仁神堂に背を向ける。

両肩に大きな手が置かれ、優しく揉みだした。

最初は張っていた肩に痛みを感じたが、程なく心地よさに変わる。

「案外、上手いのね。前にもやつた事があるみたい。」

「敬一郎様がお好きでしたので。」

優しい手つきとは正反対の冷たい声音で返事が来た。

彼は以前、私の祖父の専属秘書をしていた。

「こんな事までやつていたの？まるで雑用ね。」

「……仕事ですの。」

私はマッサージされながら、何気なくリモコンを手に取った。
巨大なモニターが降りてくる。

ソファの正面の壁のスクリーンには暖炉が映し出され、焚き火のよう燃え盛る炎が本物の如く揺らめいていた。

知らない間に季節は廻り、冬が近づく。

寝る時とエクササイズの時間以外は四六時中ビジネススーツを着ているので、自宅のクロゼットの中は明らかにスーツの数が私服の数を上回っていた。

「新しいセーターとマフラーが欲しいわ……。」

独り言のように小さな声で呟いた。

どれ位経ったのか、いつの間にか肩にあつた重圧はなくなっていた。
思った以上にこの男はマッサージが上手い。
止めて欲しくなった。

「背中も叩いて頂戴。」

「かしこまりました。」

背後でソファが波うち軋む音がした。

仁神堂は体勢を変えたらしく。

彼の温かい息遣いを背中に感じる。

その上、上品なコロンの香りまで私の鼻をくすぐった。

私の中で、悪魔がむくむくと頭を擡げる。

この男を、試してみたい。

この男が何処までやつてくれるのかを。

「次は、足をよろしいかしら？」

背中がすつきりすると、靴を脱ぎながら指示した。

仁神堂は何も言わず、ただ私が大きなソファーにうつ伏せになるのを見守った。

幸い、今日はパンツスースーだ。

「痛い所があればおつしゃって下さい。」

言いながら、強弱をつけてズボンの上から両足を軽く叩き出した。ふくらはぎをマッサージされながらも、私の神経はそこになかった。どうやつたら、この男からいつもと违った反応を得られるのだろうか？その事ばかりが頭の中を占めていた。

考え込んでいると、暫くして仁神堂は手を止めた。

「社長、終わりました。」

「ああ、有り難う。」

私は満面の笑みを浮かべて礼を言った。

彼は眼鏡を抑えながら、

「失礼致しました。」

と低く呟く。

私はソファーに座りなおし、微笑を浮かべたまま仁神堂を直視した。

「仁神堂、眼鏡を取つてくれないかしら？」

「眼鏡を、ですか？」

聞き返す声に驚きの色は全くない。

「これがないと私は殆ど何も見えないのでですが。」

仁神堂は多少滲つているように見えた。

私は心の中でしめた、と思つた。

「ずっととは言つてないわ。少しの間でいいのよ。」

「かしこまりました。」

そう承諾すると仁神堂は、すつと眼鏡を外してテーブルの上に置いた。眼鏡のせいか、元からなのか、目のぼりが深い。

一見、純日本人には見えない整つた綺麗な顔立ちをしていた。薄茶色の硝子のビー玉で出来たような冷たい瞳は、濃くて長い睫毛に縁取られている。

意外と、魅力的じゃない。

一ヶ月もの間気が付かなかつたなんて。

私は、もつとこの男を追い込んでやりたい、と思つた。

「もし、ここで私がマッサージ以上のこととを要求したらそれはセクハラになるのかしら？」

仁神堂の顎の下を軽く手で触れる。

「私が拒否するのを社長が無理やりなされたのなら、それはセクハラになると思われます。」

仁神堂に、動搖という言葉はないらしい。

私の不躾な質問にすら、落ち着いた声で答える。なんて男かしら？

「あなたは嫌かしら？」

私は、真顔に戻つて熱い眼差しで彼を見つめる。

そう。これは全てこの男の本性を暴く為の、演技。

「それは、事によりますが。」

「そう。事によるのね。」

私は、ひつひつめでいた髪の毛のゴムを解いた。

茶色くて長い髪がはらり、と肩にかかる。

髪の毛をかき上げた後、優しく聞いた。

「なら、これはどうかしら？」

ゆつくりと、仁神堂に顔を近づける。

薄くグロスを引いた唇を軽く、彼の右頬に触れさせた。

反応はない。

彼の顎に再び手を置きながら、少しづつ歯をずりしていく。

口の端ぎつぎりまで来て、顔を離す。

私は彼を焦らそうとした。

だが、彼を見ると先ほどと変わらず、無表情で私を見つめていた。

やがて、口を開く。

「社長は、これがお望みだつたのですか？」

私はその言葉に顔が赤らんだ。

決まりが悪くなる。

が、平静を装つて仕事用の営業スマイルを浮かべた。

「ええ、そうよ。」

容赦ない質問は続く。

「気がお済みでしょうか？」

「えつ？」

気がお済みでしょつか、ですって？

済む筈がないじゃないの。

私はまだ、何も見ていない。

このロボットのような男の心の中を探るまでは……。

「いいえ。済んでないわ。」

そう素直に答えてしまう。

「そうですか。それでは……。」

それは一瞬の出来事だった。

気が付いたら体は引き寄せられていて、私は長くて熱い口付けに応えていた。

丁寧に、味わうように、舌を絡ませる。

恋人とも、こんな熱いキスをしたことがなかつたかもしれない。
もしかして、焦らされていたのは、私の方？

体が意思に反して火照りだす。

が、突然、仁神堂は顔を離した。

眼鏡をテーブルから拾つて再度かける。

何事もなかつたかのようにいつものポーカーフェイスで服装の乱れを正し、腕時計を見た。

「後、40分弱でダラスに到着です。社長はご支度に取り掛かられた方がよろしいでしょう。」

私は、その一言で我に返つた。

私も、氷の仮面をつけて、心の中の動搖を隠す。

声が上擦らないように気をつけながら、

「テーブルの書類をまとめておいて。」

とだけ伝えて、化粧室へ向かつた。

狭くて小さい機内のシンクでソープを泡立てながら、崩れかけていた化粧を熱いお湯で洗い落とした。

タオルで拭つた後、携帶用の化粧水をつける。
手馴れた作業をしながら、ずっと考えていた。

この私が、動搖している。

冷静さでは、誰にも負けないとと思っていたのに。

「社長」という肩書きが有る以上、同情や不必要な感情を捨て割り切ろうと努力していたのに。

やはりあの男は、只者ではない。

でも、いつかは。

いつかは、仁神堂涙の面の皮を剥がしてみせる。

一通りの事を終えて化粧室を出た私は、横目で向かい側のラブシートで何事もなくノートパソコンの画面に見入っている仁神堂を見つめながら、傍らのニアフォンに手を伸ばす。

慣れた手つきで番号をダイアルした。

… 口スにいる恋人の声を聞く為に。

後で気付いた事なのだが。

テーブルの上の書類は全て綺麗に片付けられていて、代わりにそこにはJICOニーからデオールの専属顧客用冊子まで、冬のファッショングカタログが何冊も積まれて置かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4831c/>

仁神堂シリーズ

2010年10月10日02時28分発行